# 令和８年度　第１回不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会 要旨

１　日　　時　　７月８日（水）　１３：００～１５：００

２　開催形式　　Web 会議サービス Zoom によるオンライン開催

３　出 席 者

荒井座長、近藤委員、小松委員、髙橋委員、篠田委員、
中村委員、中島委員、宮原委員、中澤委員、倉石委員

４　内　　容

（１） 開　会

・ あいさつ（長野県教育委員会事務局　教育次長　清水　覚）

（２） 各課より報告

〇心の支援課

・ 文科省担当者連絡会における「はばたき」の報告について
・ 県メタバース運営の見通し
・ 新たな支援の枠組みの構築について

〇次世代サポート課

・ 信州型フリースクール認証制度の取組状況
・ 支援者のつどい等について

（３） 意見交換

① それぞれのお立場から（不登校児童生徒支援の状況、感じている課題）
② 家から出ることができない子供への支援
・県メタバース運営における留意点
・アウトリーチ支援の状況
③ 校内における不登校支援、教育支援センターの運営等について
④ 市町村教育支援センターの運営の工夫等について

【意見交換の要旨】

**荒井座長**
　どうもありがとうございました。ただいま２つの課から取り組みを報告いただきました。もう少し確認したいことがあれば、ぜひご発言ください。

**中村委員**
　メタバースの件、非常に興味はあるのですが、相談ができるというようになっていますが、相談員が必ず誰かこの空間の中に常駐しているような形になるのでしょうか。

**事務局（林）**
　毎日開放ではないのですが、開設した時間帯には心理師と県のスタッフが必ずいるというような状況になっております。

**中村委員**
　ありがとうございます。県の方でもこちらについての人材は手厚く配置いただいているという理解でよろしいですか。

**事務局（林）**
　既存のスタッフで運用できるように、今取り組んでいるところであります。

**荒井座長**
　どの課がどのような連携のもとで運用されているのかは、利用者さんにとっても安心材料になると思いますので、ぜひ、共有させてください。メタバースについては論点の一つにしたいと思います。

**中島委員**
　僕もメタバースの話ですが、すごい素晴らしいサービスで、いろんな引きこもっている子たちとかに届けばいいなと思っている中で、どのように情報を届けていくのか、そこのところの施策のようなものがあれば、ぜひ教えていただきたいと思います。僕らもどんどん伝えていこうと思うのですが、他にどういうふうにやっていけば伝わっていくのかお話しできたらと思います。

**荒井座長**
　ありがとうございます。事業自体の広報のあり方とも関わります。また、フリースクールと繋がっているお子さんに、こういったものを利用してみたらどうかなど紹介できるといいと感じました。心の支援課として、現時点でこういうことを考えているとか、こういう資料を作っていることなどありますか。

**事務局（林）**
　非常に大事なところかと感じておりまして、利用者への周知方法や、あるいは誘い出し方ですが、今のところ考えているのは、市町村教育委員会や学校からの一斉連絡ツール、メールや校務支援システム等を活用しての案内、また市町村の支援者、教育委員会スタッフや教育支援センタースタッフ、また市町村の福祉部局、あるいはフリースクール等の方々へ周知してまいりたいと思います。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとつながっているお子さんにはそこからの案内、また公的にはプレスリリース、教育委員会定例会による報道機関の活用、また県のホームページに掲載した形で、今のところ考えておりますが、また後ほどより良い周知の方法とか、誘い出しの方法がありましたら、またアイデアいただければと思います。

**荒井座長**

ありがとうございます。またご提案いただけたらと思います。私からも質問をしたいのですが、心の支援課からの説明でありました、平成 30 年の３月に公表されている「不登校未然防止および不登校児童生徒への支援のための行動指針」ですね。説明の中では、一定の役割を終えたというフレーズがありましたけれども、行動指針は、今ホームページ等にも掲載されています。国の施策でも通知の廃止などが行われる際には、ホームページ上にもこちらの通知は廃止します、修正しますということが書かれることも増えてきています。「役割を終えた」というニュアンスは、どのように受け止めればいいでしょうか。

**事務局（臼田）**

ご指摘のとおりだと思っています。現在、ホームページ上では、これまで一番上の目立つ位置に掲載していたものを少し下げてはいるのですが、今後は二つの方法を考えています。一つは、ご意見をいただいたように、終了したことが分かるように線を引くなど、明確に区別できる形にすることです。もう一つは、これまでの経過や取組の歩みが分かるように、専用のフォルダを設けて、「過去の経過」といった形で整理・収納していく方法です。そういったやり方も考えられますので、今後検討していきたいと思っています。

**荒井座長**

県のホームページでは、新しいものが上に記載されていく課と、その逆の課などがありますので、そこも整えていただけるといいのではないかと思います。

では「意見交換」に入ります。まず、昨今の不登校をめぐる状況認識や課題認識などをお聞かせいただけますか。では中島さんからお願いします。

**中島委員**

ありがとうございます。少し絞ると学校の先生たちのフリースクールに対しての理解はかなり上がっていると思っていますが、県の皆さんも本当に大変中よく動いてくださっている中で、どうやってフリースクールを頼っていいかというところが、学校の先生の困り感としてとてもあるので、僕らとしてもどうやっていい連携ができるのかという事例をしっかり伝えていかなきゃいけないなと学校の先生たちと話し合っているところです。

あとはオンラインの可能性をちょっと探らなきゃいけないなってところで、やっぱり実際に居場所に来られる子たちの人数と、例えば千曲市内の不登校の人数で換算すると全然で、2、3 割ぐらいしか僕は関われてないというのが現状だと思うので、オンラインの可能性、メタバースの可能性を、僕らもしっかりやっていかなきゃいけないなと思っております。

**荒井座長**

ありがとうございます。極めて重要な点です。お互いの顔が見えてきた段階で、学校側としてはどのフリースクールをどのように紹介するのがお互いとってよいのか、気持ちよい連携体制を図っていけるのかはポイントになります。

**近藤委員**

学校現場を離れてみて感じるのは、まだまだ学校に行けないお子さん方の実態把握が十分ではないのではないかということです。もちろん、学校でも把握はしているのですが、どうしても学校という場では、中島委員さんからもお話があったように、これまでの教育課程の枠組みの中へどう戻してい

くかという意識で働きかけてしまいがちです。そうすると、かえって子どもを頑なにしてしまったり、保護者の方も焦りを感じてしまったりするのではないかと感じました。

ぜひ、そのあたりを考えていただきたいと思います。以前から「学校に来ることだけが大事ではない」という考え方で進めてきているわけですから、その子がどのような気持ちで家庭で過ごしているのかという視点を大切にする必要があります。この後、家から出ることができない子どもたちの話とも関係しますが、学校に来られない子どもたちをどのように認識し、捉えていくのかについて、もう少し教育委員会や学校側で考えていかないと、フリースクールとの連携も難しくなってしまうのではないかと思っています。

また、今年はフリースクールの認証により、これだけ多くの学びの場が整備され、本当にご苦労されたことと思います。ぜひ、こうした学びの場の存在が口コミなどを通じて必要としている方々に伝わっていくような工夫も必要ではないかと感じています。メタバースだけでは少し難しいのではないかと思いますし、かといって SNS では広がりすぎてしまう面もありますので、そのあたりについて何か工夫が必要ではないかと考えています。皆さんはいかがでしょうか。

**荒井座長**

ありがとうございました。大きく２点、ご指摘をいただきました。１点目の、学校に来ることができていない子どもの把握方法については、重要な課題だと思っています。後ほど小松委員にもご発言いただこうと思っていますが、塩尻市でも、教育委員会として子どもたちをどのように把握していくのかというチャレンジをされています。

２点目のメタバースについてですが、対面支援につなげていくことが重要だというお話でした。メタバースでつながった子どもを対面支援につなげるといっても、そこでいう「対面」にはさまざまな形があると思います。在籍する学校かもしれませんし、教育支援センターかもしれません。スクールソーシャルワーカーかもしれませんし、フリースクールかもしれません。「振り分け」という言葉が適切かどうか分かりませんが、どのような支援先につないでいくのが適切なのか、その判断をどのように行っていくのかということは、今後の大きな課題になるのではないかと思います。また、そのためのノウハウを県としても蓄積し、共有していく必要があります。中村委員お願いします。

**中村委員**

いろいろ資料を見ていて感じることがたくさんあったのですが、もう一つ、長いこと課題として取り組んでいこうと思っていることがあります。不登校に対する理解についてです。この資料を見ていると、不登校に対する理解はどんどん変わってきていると感じていますが、子どもの困り感として理解している人は、まだまだ少ないと感じています。

資料にも「不登校は問題行動ではない」と書いてありますが、そこを聞き取れる人はまだまだ少ないという印象です。それは先生だけではなく、子ども自身が持っている困り感を言葉として聞くことがなかなか難しいというところもあると思います。

そのため、すごく時間もかかりますし、聞く側の経験値もすごく重要になると思っています。課題だとは思うものの、そんな簡単に解決できるものではないとも感じています。また、「ゴールは学校に戻ることではなく、ウェルビーイングへ」と言われていますが、逆に難しくなるという印象があります。大人でも分からない中で、自分にとってそれが何かということはなかなか難しいと思います。目指すところとしてはよいと思うのですが、その間にある理解というか、そうしたことが必要だと思っています。

**荒井座長**

ありがとうございました。不登校に対する理解は促進しても、つまり、問題行動ではないことや、ウェルビーイングを重視すべきこと、社会的自立のための支えであることなどが示されていますが、そこに至るまでのプロセスは本当に大変なものであると感じます。とりわけ、子どもの困り感をどのように聞き取っていくのか、しかもその困り感はその時点でのものであり、変化する可能性もあるということで、専門的なものだと思います。大きな課題を提起していただきました。続きまして、倉石委員お願いいたします。

**倉石委員**

よろしくお願いします。高校におきましても、不登校を経験した生徒が急増しています。そうした中で、中学校までと高校との間には、いろいろな制度の違いがあると実感しております。

例えば、中学校までですと特別支援学級があり、個別の指導が可能ですが、高校の場合は基本的に通常の学級のみであり、集団の中で支援していく形になります。そのような状況の中で、不登校を経験した生徒から、一人で静かに過ごしたい、クールダウンしたいという希望があった場合に、そのための場所の確保や人的な支援、教員の確保といった点に課題を感じております。また、特別支援に関する知識を持つ教員が不足しているという状況も感じているところです。

**荒井座長**

ありがとうございました。義務教育段階を経た後の高校段階の課題ということで、特別支援学級があるかないかという点もありますが、クールダウンできる居場所や、自分の時間割をデザインできる場づくりをどうしていくかという課題があります。さらに、人材確保や専門性の部分についてもご指摘いただきました。続いて、中澤委員、お願いいたします。

**中澤委員**

私は本校にお世話になって２年目になります。校内には中間教室である「みつばルーム」という部屋があるのですが、本校の先生方の意識の中には、どうしても「教室に復帰するためのステップとしての部屋」という捉え方があるように感じています。そのため、その意識も変えていかなければならないと思い、部屋にソファーを置いたり、教室のような机の配置ではなくしたりするなど、子どもたちと相談しながら、リラックスできる環境づくりに取り組んでいます。教室に戻るための場所ということではなく、自分の居場所として、自分のやりたいことができる「みつばルーム」となるよう、昨年度から少しずつ取り組んできています。

そんな中で、ある生徒はギターがとても得意でした。ギターは学校に持ってきてはいけないものとされていたため、学校では弾けないものという扱いになっていました。しかし、私と教頭、生徒指導担当で話し合い、「いいのではないか」ということになり、持参を認めました。すると、その生徒はギターを持ってくるようになりました。勉強する時間もありますが、「この時間はギターをやる時間」と自分で決めて練習をしています。

また、時々校長室に来て、「これが弾けるようになったので、校長先生聞いてください」と言って演奏してくれることもあります。このように、自分のやりたいことができる空間と時間があることを保証してあげることで、その生徒は学校に来ることができるようになったという事例もあります。
まだまだ学校という空間が、とても狭く感じられる子どももいるのだろうと思っています。また、「みつばルーム」以外にも取り組みを行っています。これは少し見づらいかもしれませんが、ある子どもは「わ」や「か」の音を出すのが苦手なため、「わくわく放課後クラブ」という名称で、今年から活動を始めました。

これは、不登校傾向の子どもたちを対象にした取組です。今週金曜日に第３回を予定していますが、夕方６時半に集まり、みんなで何かをするイベントのような形で実施しています。これまで、第１回

はポテトチップスの味比べ大会、第２回は餃子の皮を使ったミニピザ作りを行いました。第３回は、みんなで少し体を動かすモルックを行う予定です。

第１回は 15 人ほど、第２回は大人も含めて 20 人ほどが参加し、家族やコミュニティスクールの関係者にも参加していただきながら、にぎやかに活動しました。こうした取組が、昼間に学校へ来ることにつながるかというと、まだ不透明な部分もあり、課題はあると思っています。しかし、そのような機会だけでも学校に来て、制服でなくてもよい、来ても来なくてもよい、来たければ来ればよいし、途中で帰ってもよいという形で実施しています。また、先生たちも普段の服装ではなく私服に着替え、一参加者として関わっています。学校のこれまでの枠を少し取り払った形で取り組んでいるところです。そのような中で、「学校」というイメージを少し変える取組を始めていますが、なかなか難しいところもあるというのが現状です。

**荒井座長**

わくわく放課後クラブの実践について、この取組は、コミュニティスクールが主体となって運営されているという理解でよろしいでしょうか。

**中澤委員**

すみません。実は本校では「やまびこ加配」の加配をいただいておりまして、当初は、その教員が不登校傾向の子どもたちに関わりながら進めていく予定でした。しかし、実際にはその人材が見つからず、現在も配置できていない状況があります。そのため、登校支援コーディネーターである教頭と教務主任が中心となって企画・運営を行っています。また、教員については、この活動に参加したい者が参加し、勤務の割り振りを行いながら対応しているところです。

**荒井座長**

ありがとうございました。お伺いした意図は、この後の論点にもある校内教育支援センターの運用に関わることです。運用を考えた場合、どういうスタッフが、どういう役割分担で、どの時間帯に対応するのかは、学校としても切実な課題になるのではないかと思います。

また、管理職としても把握していく必要がある中で、新しいチャレンジをされている際に、どのように運用されているのかが気になり、お伺いしました。おそらく教員間の意識の差もあると思いますし、先ほどお話にあった「教室復帰のためのステップ」という捉え方についても、学校関係者としては、学校に来られているのであれば教室にも戻ってきてほしいという願いがあることは否定しがたい部分だと思います。

そのような意味でも、大変学びの多い時間になりました。ありがとうございます。また、子どもたちと一緒に相談しながら空間をつくっていくという取組は、とても素敵な場づくりだと感じました。続きまして、宮原委員、お願いいたします。

**宮原委員**

ここまでのお話を伺っていて、多様な学びの場を選択するということが、小学校でも当たり前にできるようになってきたと感じています。私は今年度からこの学校に来て、まだ数か月ですが、本校にもフリースクールに通っている子どもや、市が設置している教育支援センターを利用している子ども、また校内教育支援センターを利用している子どもがいます。このように、本当に多様な場を選択できるようになってきていると感じています。

その結果として、昨年度は 30 日を超える欠席があった子どもでも、今年度はこのまま順調にいけば 30 日に達することなく過ごせるのではないかという見通しを持つことができています。特に、フリー

スクールとの連携も進んでおり、フリースクールに通っている子どもが運動会に参加するなど、そのような連携もできていると、この一学期を通して感じています。

一方で課題としては、本校に限らず、多くの学校で不登校の子どもの家庭への支援が必要なケースがあることです。行政や家庭相談室との連携は行っていますが、家庭側に主な要因があるかもしれないと思われる場合でも、そこへさらに一歩踏み込んでいくことには難しさがあります。

また、市の教育支援センターを利用しようとしても、そこまで通う手段がない、あるいはフリースクールがよいと思っても通わせるための手段がないといったことをご家庭が課題として抱えている場合もあります。そのような点は一つの課題だと感じています。

もう一点、先ほどのメタバースの話に関連してお話しします。子どもと全く会うことができず、家庭にこもっている子どもに対しては、メタバースの活用をぜひ進めたいと思っています。ただ、ご家庭も子ども本人も、実際にどのように利用するのかというイメージが持ちにくい状況があります。この空間の名称も含めて、実際にどのように参加するのか、どのように通うのかといったことを試せる機会があるとよいと思います。学校から紹介する際にも、「こんな形で利用することができる」ということを保護者にも見ていただけると、より周知が進むのではないかと感じています。以上です。

**荒井座長**

ありがとうございました。

宮原委員の学校では、フリースクール利用者、校外の教育支援センター利用者、校内教育支援センター利用者と、本当にさまざまな形で学びの場を利用している子どもたちがいるということでした。そうした中で、子どもたちが何らかの形でつながれているという点では、一歩前進しているように感じます。一方で、今後は学習指導要領の改訂論議も踏まえながら、不登校児童生徒の教育課程を編成して行くかも改めて考えていく必要があるのだろうと思います。

また、家庭への支援について、ここでいう「支援」とは何なのかも考えていく必要があります。フリースクールの関係者の方々の関わり方を見ても、経済的支援だけではなく、話し相手としての存在や保護者への寄り添いも含まれていると思います。

メタバースについても、何のための空間なのか、何ができるのかなど、実際に経験したことがない場合は、お互いにイメージを持ちにくい部分があると思います。まずはつながりを持ち、次につなげていくという意味でも、例えば 1 分程度の動画を作成するなど、事例を共有していくことが必要ではないかと感じました。篠田委員、いかがでしょうか。

**篠田委員**

私はフリースクールを運営している民間の立場からお話しします。課題や現状についてですが、私たちの施設は小規模ではあるものの、小学 1 年生から中学 3 年生まで、全学年合わせて 30 人以上が登録しています。施設は松川町にありますが、松川町を含めて 7 市町村、13 校から子どもたちが通っている状況です。そのため、常に 13 校の学校と出席に関する連絡や支援会議、情報交換を行いながら日々運営しています。それでも施設としては、定員 30 人程度でほぼいっぱいの状態です。そのため、今年度は新たな受入れが難しい状況になっています。相談についてはもちろん受けていますが、本格的な登録についてはすぐにはお受けできず、空き待ち、あるいは来年度の登録としてお願いしている状況が続いています。大変心苦しいのですが、すでに飽和状態になっており、これを今後どうしていくかということが一つの課題だと感じています。

また、松川町の場合は送迎体制があります。町内の小・中学生が利用しており、町の公用車が運行されているため、HUG から自宅まで無償の送迎サービスを利用することができます。さらに、学年会にも呼んでいただき、町内の子どもたちの状況について、私も一緒に参加してお話しさせていただく機会が、今年度から設けられています。

そのほかにも、理科の実験教材を借りたり、握力を測りたい子どもがいるときには握力計を借りたりするなど、学校から教具をお借りすることもあります。このように、地域が学校に入り込むということももちろんありますが、一方で、行政や学校が持っているリソースを地域へ開放していくということも進められています。フリースクールとしても、そうした恩恵を受けながら活動しているところです。こうした取組や連携が、今後さらに広がっていくとよいのではないかと思っています。

また、先ほど中村さんもおっしゃっていましたが、意識改革という点で、ウェルビーイングという考え方は今かなり広がってきていると思います。ただ、やはり不登校の子どもたちは、本当に「明日どうなってしまうかわからない」というような毎日を生きていると感じています。私たちは、命を守る支援というか、命を守る仕事をしなければならないという感覚で関わっています。おそらくフリースクールに関わっている皆さんにはよく分かっていただけると思いますし、もちろん学校も同じだと思いますが、フリースクールでは特にその側面が色濃いように感じています。子どもたちが日々苦しんでいる状況がある一方で、フリースクールに通うようになった後も、家庭によっては「そんなところへ行って遊んでばかりいる」「ゲームばかりしていて将来どうするのか」「あんなところへ行っても仕方がない」と言われることも実際にあります。先ほど家庭支援という話もありましたが、そのような意識の問題も含めて、本当の意味での心身の健康やウェルビーイングを、教育や福祉の分野の中で、大人も子どもも大切にしていくことをどう進めていけばよいのかということについては、運営者として非常に悩んでいるところです。

また、平日の昼間に利用できるリソースが、私たちのような地域では非常に少ないと感じています。平日の日中に機能する人や場所、子どもたちが選択できる場としてのリソースが、物理的にもう少し増えていくとよいと思っています。メタバースも大切なリソースの一つだと思いますが、それに加えて、実際に利用できる場所や人といった資源が、自治体単位でもう少し増えていくとよいのではないかと感じています。以上です。

**荒井座長**

ありがとうございました。平日の昼間に使えるリソースについてですが、具体的にはどのようなものをイメージされているのでしょうか。

**篠田委員**

ふらっと立ち寄ってお茶を飲みながら話を聞いてもらえる場所でもいいですし、それほどしっかりした施設でなくてもよいと思っています。少し体育館が使えて遊べるとか、ゲームができるとか、料理ができるとか、本当にどのような内容でもよいのですが、そうした場所があることで救われる子どもたちはいるのではないかと思います。

**荒井座長**

わかりました。ありがとうございます。それでは、残りお二人の委員は教育委員会のお立場ということで、一つ目の論点とも関わりますが、ぜひ市町村としてチャレンジされていることや、昨今よく話題になるアウトリーチについてもお聞かせいただければと思います。まず、髙橋委員から、佐久市を中心とした取組や、現在のアウトリーチの状況について情報提供をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

**髙橋委員**

お願いします。まず、不登校の状況についてですが、昨年度に顕著だったのは、小学校 1・2 年生の 30 日以上欠席する児童がとても増えたことです。そのことから、低学年の子どもたちに対する支援が必要だと感じています。

私は指導主事も担当していますので、本年度５月時点の長期欠席の状況について集約しています。30 日以上の欠席に至っていない場合でも配慮したい子どもを含め、小・中学生の報告を集約している中からいろいろと見えてくることがあると感じています。今年度は４月の段階で、画面では少し見えにくいかもしれませんが、このような資料（誰一人取り残すことなく、心と体の健康を保ちながら、学びを保障する「佐久市のえらチャレ」）を各校の PTA 総会資料に掲載していただきました。内容としては、「こんな気持ちになったら、こんなところに相談してみよう」といった相談先の紹介や、学校以外にも居場所や学びの場があることを紹介するパンフレットです。それを全家庭に届くようにしました。

また、佐久市では「チャレンジ教室」と呼んでいる校外教育支援センターを教育委員会で設置していますが、７月１日に新たな拠点を設置し、これまで１か所だったものを２か所に増やしました。まだ始まったばかりですが、この１週間だけでも多くの方が見学に来てくださり、新たな通室希望も寄せられています。その中には、私が取りまとめている資料には名前が載っていなかった子どもも多くいました。これについては、まだ把握が十分にできていなかった子どもたちがいるということなのかもしれませんし、あるいは今回の新設によって、これまで以上に情報が届いた結果なのかもしれません。いずれにしても、情報を届けるための工夫をさらに進めていく必要があると改めて感じています。今回の移転・新設をきっかけに、これまで私たちが把握していなかった子どもたちが来てくれたことは、本当にありがたいことだと感じています。そうした子どもたちが、なぜ来てくれたのか、また私たちがまだ十分に知り得ていない状況についても、今後丁寧に話を聞いていけたらと思っています。

あと、「おもがえっこ」さんとも近いこともあって、佐久市の子どもたちもお世話になっていますので、ほかのフリースクールも含めて、できるだけ情報共有や連携をさせていただいております。それぞれの取組から学ぶところがありますし、やはり今は単独だけで頑張ってもなかなか難しい部分がありますので、お互いに連携しながら、それぞれにできることを共有していくことが大切ではないかと考えています。

**荒井座長**

ありがとうございました。教育委員会の立場の方から今のようなお話を伺えると、フリースクールの関係者の皆さんにとっても大変心強いことではないかと思います。佐久市の「チャレンジ教室」については、報道などでも取り上げられています。今後も情報共有をさせていただければと思います。また、先ほどお話にあった小学校 1 年生の増加、つまり不登校の低年齢化についても、皆さんそれぞれのお立場から共有いただけることがあれば、後ほどご発言いただければと思います。それでは、小松委員、お待たせいたしました。いかがでしょうか。

**小松委員**

「誰一人取り残さない」という言葉がよく使われます。塩尻市では、「誰一人取り残さない」のであるならば、「誰ともつながっていない子どもをなくそう」ということを学校間でも共有して、昨年度から取組を始めています。「誰ともつながっていない」ということを具体的な数値で見るには、先ほど心の支援課から示された資料にもありましたが、不登校児童生徒が学校内外の機関で相談や指導を受けた状況についての円グラフがあります。その中で、「学校内外の機関や教職員から継続的な相談・指導を受けていない」子どもが、県全体では 1.6%いるという結果が示されていました。塩尻市では、この数値に着目し「誰ともつながっていない子ども」ととらえ、ゼロにしようということを昨年度から取り組んできました。そして、今年度公表された調査結果では、昨年度の状況を示したものですが、「誰ともつながっていない子ども」が、調査上では０％になりました。そこで今年度からは、「誰かとはつながっている」という段階に進んだとらえ、これからはそのつながりの質の向上を目指していこうということを合言葉にしています。

具体的には、子どもたちに安心できる居場所があるか、それから話せる大人がいるか、この 2 点でつながりの質を見ていきましょうということを、校長会等でも確認しています。安心できる居場所という点では、塩尻市には２年前までフリースクールがありませんでしたが、今年度は 4 か所になりました。これは認証制度ができたことの効果ではないかと考えています。そうした中で、私がコーディネーターの立場でフリースクールへ出向いたり、学校の先生方が訪問したり、またフリースクールの代表の方に学校の授業へ参加していただいたりしています。さらに、フリースクールに関する研修なども行いながら、学校と民間の支援者との距離を縮めていこうと取り組んでいます。

そのような取組を進める中で、課題となっているのは、「話せる大人がいる」という視点です。子どもが安心して話せる大人になるためには、どのように子どもにアプローチしていけばよいのか、その点についても考えていきましょうということで議論を進めています。

なかなか家から出られない子どもがいます。家から出られなかったとしても、何かつながりがあって、話ができる大人がいればよいのではないかと思っています。塩尻市では、市の支援員を配置しています。市の支援員は子どもたちへのアウトリーチ支援も行っています。また、それぞれの小・中学校全校に、校内教育支援センターの人材を加配しています。今年度からの取組です。

さらに、教育支援センターでは、居場所づくりの一環として、ネイル体験や陶芸、生け花など、さまざまな講座を行っています。支援員がこのような講座のチラシを家庭に届け、家にいる子どもに渡して、「こういう講座があるけれど、参加してみないか」と声をかけています。そうした働きかけをしながら、子どもたちが一歩外に出るきっかけづくりにつなげていければよいと考えています。

そうした場所に一歩出ることができると、不思議なもので、さまざまな変化が起こります。一つの講座に参加できるようになると、今度は別の講座にも参加できるようになったり、これまで家にいた子どもが校外の教育支援センターに通えるようになったりすることがありました。また、フリースクールに通い続けていた子どもが、そこでエネルギーを蓄えながら過ごし、学校復帰を目標にしていたわけではないけれども、結果として学校に復帰できたという事例もあります。このように、子どもたちにはさまざまな動きや変化が見られるようになってきています。そうした一つ一つを大切にしながら、今後も取組を進めていきたいと考えています。以上です。

**荒井座長**

ありがとうございました。先ほどのウェルビーイングや社会的自立の話とも重なりますが、「誰一人取り残さない」という言葉は、空洞化しやすい面があります。その点、塩尻市では、「誰ともつながっていない子どもをなくそう」という具体的な目標に置き換えて取り組まれております。ありがとうございます。

さて、それぞれの課題意識を共有させていただきましたが、ここからは個別の論点について、ご発言をいただきたいと思います。まず一つ目として、「家から出ることができない子どもをどのように捉えるか」ということがあります。小松委員のお話でいえば、学校であれ、市町村であれ、あるいはフリースクールであっても、連絡を取ること自体が難しい水準の子どもが一定数いるのではないかと思います。先ほどは、佐久市や塩尻市のアウトリーチ支援の状況についてお聞かせいただきましたが、他の委員の皆様からも、この家庭支援や家庭との関わりについてご経験があればお聞かせいただきたいと思います。また、どこかの組織と連携して取り組んでいる事例や、フリースクールの立場から、ご家庭への支援を行政と一緒に行っているような取組があれば、それについてもぜひお聞かせいただきたいと思います。

このほか、メタバース、アウトリーチに関しても何か事例や実践例をお持ちの方がいらっしゃいましたら、お聞かせいただければと思います。委員の皆さん、いかがでしょうか。では宮原委員お願いします。

**宮原委員**

本校にも、本当に顔を見ることもできない子どもがいます。そのような中で、スクールソーシャルワーカーが唯一つながってくださっています。ご家庭のお母さんとは、担任などが時折連絡を取ることはできるのですが、子ども本人との接触は難しく、学校の職員が会うこと自体が刺激になってしまうため難しい、というお話もいただいています。そのような状況の中で、SSWが家庭とつながりながら、子どもの様子の確認などもしてくださっており、大変ありがたく感じています。

**荒井座長**

ありがとうございました。フリースクールの立場から見ると、例えば SSW の方と一緒に支援を行ったり、情報共有を行ったりしている事例はありますでしょうか。篠田さんのフィールドでは、連携は比較的進んでいて、ご協力もいただけているという理解でよろしいでしょうか。委員の皆様からも、もしよろしければその点について少しコメントをいただければと思います。

**篠田委員**

そうですね。常に一緒に連携して支援しているというわけではないのですが、基本的な連携体制はできています。何かあれば教育事務所に連絡して相談させていただいていますし、スクールソーシャルワーカーの先生からご連絡をいただくこともあります。例えば、高校生以上の子どもが、長期休業中や学校に行きにくい日に過ごせる場所として、私たちが運営している居場所を活用できないかという相談を受けることがあります。そのような場合には、受け入れを行うこともあります。これまでにも、そうした形でつながりながら支援を行ってきました。

**荒井座長**

ありがとうございます。今のお話を伺っていて、若者支援という観点からすると、不登校の義務教育段階の児童生徒を支援している場に、高校生がお手伝いに行ったり、高校生自身の居場所になったりするケースは、全国的にも報告されています。そう考えると、フリースクールを義務教育段階の子どもたちだけのものと捉えるのは、少し狭い理解なのかもしれません。若者世代についても、一人のユースとして安心して過ごせる居場所が必要なのだろうという感覚を持っています。

このほか、メタバースについてご意見を伺いたいと思います。県としても、これは今年度からの新たなチャレンジになります。中島委員をはじめ、気になることや、「こういうことがあるとよい」といったご意見もあるかと思います。中島委員、いかがでしょうか。

**中島委員**

ありがとうございます。子どもたちの目線で考えると、ゲームをしたり、いろいろなことをして過ごしていると思うのですが、やはりメタバースも、コンテンツが豊富なものだととてもよいのではないかと思います。

私たちも NPO 法人カタリバさんとお話をすることがありますが、自治体と連携して行われている「room-K」のような取組を見ると、プログラミングを学ぶ場や、算数教室、ゆったりとおしゃべりする場など、さまざまなコンテンツがあります。そうした前向きなコンテンツにあふれているサービスであってほしいというのが私の願いです。

相談だけを目的にしたり、困りごとなどマイナスな部分ばかりが前面に出たりすると、子どもたちもわくわくしませんし、「やりたくない」と感じてしまうと思います。そのため、あまり重たくならない形で進めていけるとよいのではないかと思います。また、子どもたちに伝える際のアウトリーチも工夫が必要だと感じています。フリースクールに通っている子どもたちの中には、自分の状況をネガティブに捉えている子も少なくありません。

だからこそ、「支援を受ける」ということよりも、「楽しみながら参加してみよう」といった形で、よりポジティブに伝えられるものであってほしいと思います。そのアウトリーチをどのように進めていくのかは、今後の課題になると思いますが、フリースクールの運営者や県の担当者などが一緒に考えていくことができればよいのではないかと思います。

**荒井座長**

まさに日頃から子どもたちと関わっている立場だからこその視点だと感じました。この点について、心の支援課にお伺いしたいと思います。先ほどカタリバさんのお話も出ましたが、資料にはオンラインゲームやイベントプログラムなどの記載もあります。少なくとも、「個別相談に乗る場」というだけではないという理解でよろしいでしょうか。もし可能であれば、「こんな取組ができるかもしれない」ということも含めて、少しご紹介いただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

**事務局（林）**

ありがとうございます。今、中島委員からお話のあったカタリバとは、私たちもさまざまな助言をいただきながら、その知見やノウハウを参考にして運営しているところです。現在は、相談だけではなく、子どもたちが気軽に集まれる仕組みがとても大事だと考えています。

例えば、クイズや迷路のようなコンテンツ、自分で作ったデジタル作品を展示できる場所、間違い探しなどを用意しています。また、支援員の興味や趣味を生かした企画として、鉄道が好きな支援員が桃太郎電鉄に関するイベントを行うといった取組も考えています。

さらに、子どもの中には、空間には参加したいけれど静かに周囲の様子を見ながら過ごしたいという子もいます。そのため、特に何かをしなくてもよいスペースも設けています。このように、さまざまな子どもたちが少しでも参加してよかったと感じ、自立につながるようなコンテンツを準備しているところです。もちろん、これで完成というものではありません。実際に運営する中で、子どもたちの声を聞きながら、またさまざまな方々の意見も伺いながら、コンテンツをさらに充実させていきたいと考えています。

**荒井座長**

こちらの部分について、市町村として県と一緒に取り組んでいるような事例や、地域の拠点として活用しているようなところはあるのでしょうか。また、心の支援課としては、この取組は県が一括して実施しているものなのか、それともお試しの協力自治体のような形で参加している市町村があるのでしょうか。いかがでしょうか。

**事務局（林）**

先ほども少しお話ししましたが、「コア連携市町村」という形で、現在いくつかの市町村に手を挙げていただいています。そうした市町村には、実際に一緒に運営を担っていただくなど、連携しながら取組を進めています。特定のモデル市町村という位置付けではありませんが、市町村との連携による取組として進めているところです。また、すべての市町村に対して説明会を実施しており、現在は事業についての周知や案内を積極的に行っているところです。そのような形で、市町村との連携を図りながら進めているところです。

**荒井座長**

座長として、お願いがございます。フリースクールの皆さんにとっても、「実際にどのような場なのか」ということは知りたい部分だと思いますし、「これからこういう場ができる」ということを、

体感を伴って伝えていくことも大切ではないかと思います。もし時間が許すのであれば、フリースクール関係者の皆さんにも、実際に体験したり体感したりできる機会を設けていただけると、お互いにとって非常によいのではないかと思います。

**中村委員**

すみません。いいのか悪いのか分からないままお話しするのですが、今日、「相談できる人はいるのですか」という質問をしました。それは、フリースクールの立場や保護者の立場からすると、そういう人がいてほしいと思ったからです。ただ、先ほど中島委員がおっしゃっていたように、「楽しい場所であることが大事」というお話を聞いたときに、はっとしました。「支援臭」という言葉があるのですが、もしメタバースを支援臭のないものにするのであれば、例えば「心理士がいます」といった肩書きを前面に出さない方がよいのかもしれないと思いました。

そこにいる人についても、資格や役職より、その人が何が好きなのかといった人柄が見える形で、その人と話してみたいと思えるようなプロフィールの方がよいのではないかと思います。支援する側としては、「ちゃんと話せる人がいてほしい」と考えていましたが、子どもたちの立場からすると、そういうことよりも、楽しさが前面に出ている方がよいのかもしれないと感じました。

**荒井座長**

ありがとうございます。広報として配布する資料の表現の仕方にも関わるでしょうし、専門性というのは資格に裏付けられたものだけではないと思います。そのあたりもぜひご考慮いただけるとよいのではないかと思います。なかなかすぐに解決できるものではありませんが、市町村教育委員会によるアウトリーチの取組と、これから進められていくメタバースの運営については、今後も進捗を共有していただけると思います。また皆さんからもお気付きの点やご意見をいただければと思います。

残り 30 分ほどになりましたので、続いて二つ目の論点、今度の校内教育支援の在り方についてです。学校内における支援の状況については、先ほどからもすでにご発言をいただいておりますが、改めてご意見を伺えればと思います。

また、校内教育支援センターの運用上の課題についても、ぜひご報告いただければと思います。さらに、フリースクール関係者の皆さんのお立場からすると、学校の担任とフリースクールとの関係がどのようになっているのか、あるいは校内教育支援センターとフリースクールとの間に連携や関係性があるのかどうか、といった点も共有できればと思います。

**篠田委員**

いただいた資料の中で、心の支援課の「校内教育支援センターの運用のために」という資料がとても素晴らしくて、すごく驚きました。ただ、私たちの地域では、そもそも「校内教育支援センター」と呼んでおらず、「中間教室」と呼んでいるところもあります。そういった支援センター的な場所については、まだここまで安心できる環境調整がなされていないところが結構多いというのが実感としてあります。

子どもたちも頑張ってその部屋に行き、給食を食べたり、そこに荷物を置いて 1 時間授業に出て戻ってきたり、あるいはその後フリースクールに来たりということがあります。ただ、その中で、「おしゃべりはしないで」「自習できる勉強以外はしないで」「他の子どもの学習の機会を奪わないで」と言われたり、あるいは「マナーがなっていない」「あいさつができない」といったことを言われたりして、すごく傷ついて、その後こちらへ来て思いを話してくれるというケースが毎年あります。

そうしたことについては、学校ともちろん話し合いをさせていただいています。やはり、第一に安心できる環境であることが大切であり、子どもたちは本当にぎりぎりのところで登校しているということを学校側にもお伝えしています。そこで一点、質問になります。この資料にあるような校内教育支援センターの運営について、「このように取り組みましょう」という基準や指針のようなものは、

学校に対して示されているのでしょうか。通達というのか、運営の方向性を示すようなものが各学校に伝えられているのか、そのあたりを教えていただければと思います。

**荒井座長**

心の支援課からもお答えいただければと思いますが、今の点は非常に重要だと思います。国レベルで見ると、現在は「校内教育支援センターを設置しているかどうか」というレベルの調査しか行われていません。ですので、実際にどのような空間づくりがされているのか、支援者は誰なのか、その方々の勤務体制はどうなっているのかといったことについては、全国的にかなりばらつきがあると認識しています。

私が調べた限りでは、登校復帰を前提とした校内教育支援センターもありますし、逆に、不登校児童生徒に限らず利用できる校内教育支援センターを設けているところもあります。そのため、場づくりや空間づくりという点では、先ほど篠田委員から心の支援課作成の資料についてお褒めいただきましたが、行政が褒められることはなかなか多くないので、本当に良かったなと思っています。そして、このような空間が広がっていくとよいと、皆さんも感じてくださったのではないかと思います。

何をお伝えしたかったかというと、校内教育支援センターの在り方は、県内でも全国的にもかなりばらつきがある状況だということです。逆に言えば、だからこそ、どのような方向性や要素が大切なのかを、県としてメッセージを発信していく責任もあると思いますし、そうした方向へ寄せていける余地もまだ十分にあるのではないかと感じています。

**事務局(臼田)**

ありがとうございます。この資料につきましては、県とつながりのあるさまざまな加配や配置のある学校を中心に訪問させていただき、その中から特に好事例を集めてお伝えしたものです。そのため、もちろん現状では、まだ物的な環境が十分に整っていない学校もありますし、校内教育支援センターがどういう意味を持つ場なのかということについても、学校ごとに認識の差があるのではないかと思っています。一方で、国が設置の有無を調査しているということは、「校内教育支援センターは設置していくべきものである」というメッセージとして、かなり強く伝わっていくのではないかと考えています。

また、規模の大きな学校では、正しい表現ではないと思いますが、ある程度安定した人数の利用があり、卒業しても次の利用者が入ってくるという状況があります。そのため、継続的に活用される汎用性のある施設として整備されていく傾向があるのではないかと感じています。

一方で、小規模な学校になりますと、本当に1人、2人のために、その子に応じた環境を整えていくことになります。年度が替われば対象となる子どもも変わりますし、それに合わせて校内教育支援センターの在り方も変わっていくものだと思います。ですので、一概に「こういう形がよい」と示すことが難しい面もあり、その点については感じているところです。そのため、さまざまな実践やばらつきについても前向きな事例として伝えていきながら、最終的には「目の前の子どもにとって何が必要か」という視点を持って、変化し続けていける校内教育支援センターであってほしいと考えています。

今年度もさまざまな学校を見せていただきながら、そのようなメッセージを伝えていきたいと思っています。また、校内教育支援センターに関わることを通して、先生方自身の見方や関わり方も変わっていくような、そうした動きにつながっていけばよいと願っています。

**荒井座長**

はい、ありがとうございました。今お話しいただいたように、校内教育支援センターにはさまざまなばらつきがあるのが現状だと思います。例えば、利用するための入口の部分だけを見ても、「こういう条件を満たさなければ利用できない」「保護者の同意書が必要である」「申請や許可が必要であ

る」など、仕組み化が進んでいるところもあります。一方で、仕組み化がかえって利用のハードルを高くしてしまい、気軽に利用できなくなっているという報告もあります。

先ほどの環境調整の話ともつながると思いますが、その子のために毎回特別な対応を準備しなければならないとなると、先生方にとっても大きな負担になります。そうではなく、学校全体を支える拠点のような形で校内教育支援センターの空間づくりができれば、利用する子どもの人数の増減に関わらず、柔軟にコーディネートしていく余地もあるのではないかと思っています。またぜひ、皆さんも知見や経験がありましたら、県全体へのメッセージという観点も含めてご意見をいただければと思います。引き続きコメントをいただければと思います。

**中島委員**

千曲市には教育支援センターが４か所ほどあるのですが、小・中学生は市内であれば自分の好きな教育支援センターを選んで利用できるようになっています。そうすると何が起きるかというと、子どもたちが「この先生いいな」というところに集まります。私が特に親しくさせていただいている教育支援センターの先生がいるのですが、その先生のところには子どもたちがたくさん集まっています。私のフリースクールの近くの中学校にある教育支援センターなのですが、子どもたちはその先生のことが大好きで通っています。もちろん、いろいろな課題や問題はありますが、その教育支援センターとは私自身も非常に連携が取れていて、ふらっと行って子どもたちと一緒に遊んで帰ってこられるような関係になっています。また、子どもたちとも私との関係ができているので、そうしたつながりの中で関わることができています。

また、私が千曲市内でイベントを開催する際には、「ひまわり教室」の子どもたちが作ったクラフト作品を販売できるコーナーを設けたりしています。一緒に物品販売をしたり、その計画段階から中学校へ行って相談したりと、地域に開かれた学びの場として機能している支援センターもあります。そのような、地域に開かれた学びの場として機能している教育支援センターもある一方で、静かな環境の中で個別学習を中心に取り組む教育支援センターもあります。そう考えると、子どもたちが自分に合った場所を選べることは、とても大切だと感じています。実際、子どもたちはフリースクールのような雰囲気の「ひまわり教室」に集まってくることもありますが、「そこに行かなければならない」ということではなく、千曲市内の子どもたちは、それぞれが自分に合った場所を選んでいこうという雰囲気があります。そうした選択肢があることは、とてもよいことだと感じています。

何が言いたいかというと、フリースクールにさまざまな特色があるように、教育支援センターにもそれぞれの特色があってよいと思っています。すべてが同じ教育支援センターである必要はなく、「この支援センターにはこういう特徴がある」「ここは学習を中心に取り組む場所である」といったことが分かるようになっていてもよいのではないかと思います。というのも、子どもたちは場所そのものよりも、人や雰囲気で選ぶことが多いからです。また、中学３年生と小学校低学年の子どもが同じ場所で過ごすこともあり、中には勉強に集中しにくいと感じる子どももいます。

それでも、子どもたちは結局人との関係性やその場の雰囲気で選んでいるように感じます。そのため、フリースクールと同じように、多様な特色を持った教育支援センターがあっても面白いのではないかと日頃から感じています。私の地域にはフリースクールが一か所しかありませんので、実際には教育支援センターとフリースクールが連携しながら、それぞれの役割を果たしているような状況です。

**荒井座長**

ありがとうございました。将来的な話になりますが、全国では校内教育支援センターや校外教育支援センターの運営を民間に委託する事例も出てきています。例えば、NPOやフリースクールと連携しながら、その場づくりや運営を進めていくという形です。仮に予算は確保できていても、学校の中で校内教育支援センターを担うスタッフの確保が難しいという状況があるのであれば、そうした連携の方法も十分に考えられるのではないかと、私は思っています。それでは、宮原委員、いかがでしょうか。

**宮原委員**

学校の校内教育支援センターの現状については、それぞれの学校で違いがあると思いますので、これがすべてではありませんが、お話ししたいと思います。

まず、場所を整えたとしても、人的な支援者がいなければ、その場は成り立たないということがあります。本校もそうですし、前任校でもそうでしたが、市の支援員が半日程度いてくださることで、まず運営が可能になっています。さらに、それと連携して県の「子どもと親の相談員」が関わってくださる時間帯があり、子どもの状況に応じて一緒に支援に入っていただいています。そのように、複数の支援者がいることで成り立っている場だと感じています。

また、場所としては学習したい子どももいますので、学習面については担任と連携しながら、「どのような内容に取り組むか」を相談して進めています。小学校の場合は、ルールを設けるというよりも、その場所が子どもにとって楽しい場所になるようにということを大切にしています。例えば、その場で子どもの好きな虫を飼うことがあります。それによって、学年の生活科の学習につながったこともありました。また、支援員の先生とお菓子作りをして、それを職員室で販売するといった取組を行ったこともありました。そのように、小学校では、その場が子どもたちにとっての居場所になるようにということを大切にしています。

ただ、校内教育支援センターに常時１日配置されている支援員がいる学校は、ほとんどないのではないかと思います。そうなると、午後は見守る職員がいなくなるため、空いている職員が臨時的に対応したり、子どもたちを職員室で過ごさせたりするようなこともあります。やはり、人的支援の確保は大きな課題の一つだと感じています。

またもう一つ、校内教育支援センターに対する意識の問題もあるように思います。子どもたちにとっては学びの場ではありますが、そこを一年間継続して利用する場というよりも、一時的な居場所や支援の場として捉えられている部分があるのではないかと感じています。

**荒井座長**

校内教育支援センターの実態に即したお話をいただき、ありがとうございます。それでは続いて、校外教育支援センターについてお話を伺いたいと思います。佐久市や塩尻市で取り組まれている内容とも関わる部分になりますが、例えば先ほど話題に出た連携の在り方一つをとっても、うまくいっている点もあれば、悩ましい部分もあるのではないかと思います。

また、先ほど「はばたき」の話題の中でも触れられていましたが、出席の取扱いや評価の在り方については、まだまだ課題や悩みがあるのではないかと感じています。そこで、ほかの委員の皆さんにもお伺いしたいのですが、出席扱いに関することや評価に関することについて、お気付きの点やご意見がありましたらお聞かせいただければと思います。いかがでしょうか。

**小松委員**

私は教育支援センターの主任コーディネーターという立場で、比較的自由に動ける立場にあります。先ほども少しお話ししましたが、私自身がフリースクールを訪問し、代表の方とお話をすることで得た情報を学校へ伝え、さらに学校からフリースクールへ足を運んでいただくというような形で連携を進めています。

最近は学校も、フリースクールでの活動を出席扱いにすることが多くなっていると感じています。ただ出席扱いにすればいいというのではなく、まずフリースクールの実態をしっかり見ていただきたいと思っています。そこが単に遊ぶ場所ではなく、遊びの中にも学びがあり、日々の生活の中にも子どもの学びがあるということを理解していただいたうえで、学校として出席扱いを判断していただきたいという思いがあります。そのためにも、学校とフリースクールの連携がしっかり取れるようにしていきたいと考えています。

今後さらに学校とフリースクール、そして民間の支援者との連携を深めていきたいと考えています。先ほどの校内教育支援センターについてですが、６月に私と市の指導主事の２人で、塩尻市内の全て

の学校の校内教育支援センターを見て回りました。その中で感じたのは、学校ごとに運営の仕方にはかなり違いがあるということです。何年か前に比べると、先ほど篠田委員がおっしゃったような状況はだいぶ少なくなってきていると感じていますが、それでも学校ごとの差はありますし、さらに言えば、同じ学校の中でも先生方によって考え方や捉え方に違いがあります。

塩尻市では、今年度、市内全ての学校で校内教育支援センターの運用を開始しています。人的配置では常勤で運営している学校もあれば、0.5配置の学校もありますが、それぞれの学校で工夫しながら運用をスタートさせています。そうした中で、校長先生を中心に校内教育支援センターの運営をマネジメントしていくことは、とても大切だと感じています

ある中学校では、校内教育支援センターでリモートによる授業視聴を行いながら、一生懸命学習している生徒がいます。私が訪問した際、その学校の教頭先生から、「教室には入っていないけれども、校内教育支援センターでリアルタイムにオンライン授業を受けている場合、評定をつけることはできないだろうか」というお話がありました。そのような意識が学校の中に生まれてきていることは、とてもうれしいことだと感じました。

もちろん、評定をつけるかどうかについては、生徒本人や保護者が何を望んでいるのかということを踏まえ、十分な合意形成を図ることが大切だと思います。その上で、本人が努力して学習に取り組み、評定を希望しているのであれば、学校として評定をつけていくことも大切ではないかという話を、その学校の教頭先生ともさせていただきました。評定をつけることにはさまざまな難しさがありますが、いずれにしても、評価や評定については、中学生であれば生徒本人、そして保護者としっかり話し合いながら、合意形成を図っていくことが大切ではないかと感じています。

**荒井座長**

お話にありました評価についてですが、現在、国レベルでも学習指導要領の改訂論議が行われています。その中では、不登校の子どもたちだけでなく、外国にルーツのある子どもやギフテッドの子ども、発達特性のある子どもなどについても、それぞれに応じた教育課程を学校として整備していくことが議論されています。また、それに合わせて評価の在り方についても検討が進められています。

一方で、「評価」という言葉からイメージする内容は人によってかなり異なっており、その在り方についてはさまざまな受け止め方があります。実際に、不登校支援やフリースクールの関係者からは、懸念や反発の声も出てきていると聞いています。そのような中で大切なのは、先ほど小松委員がお話しされたように、保護者や子ども本人がそれを望んだときに、その思いに寄り添いながら、適切に仕組みとして整えておくことではないかと思います。それは教育に関わる大人の責任として行うべきことだと考えています。ただ一方で、そのことが誤って伝わったり、「ここへ行けば評価がつく」「こうすれば有利になる」といった形で、評価を外発的な動機付けとして用いながら子どもの行動を促すようなことになってしまうと、本来の趣旨から外れてしまうのではないかと思います。

当然ですが、教育関係者が行うべきことは、いわゆる評定という意味での評価だけではなく、アセスメントです。その子どもが今どのような状態にあるのかを見取り、その状況を関係者で共有しながら支援につなげていくことは、フリースクールであっても、校内教育支援センターであっても、学校関係者であっても、共通して行うべきことです。その意味で、評定としての評価と、子どもの状況を把握するためのアセスメントを区別して考えることが重要なのではないかと思います。私は、その部分を丁寧に整理して示したものが、冒頭でご紹介いただいた「はばたき」だったのではないかと考えています。国がこう言っているからそうしなければならない、という議論ではなく、やはり私たちは私たちとして、ぶれずにできることを対話しながらつくり上げていくことが大切なのではないかと思っています。

評価、あるいはアセスメントとしての見取りを関係者で共有した先に、場合によっては評定の検討につながることもあるかもしれません。ただ、その作業は言うほど簡単なものではなく、本当に大変

なことです。小松委員は前職でもご経験があると思いますが、この国の評価はテストの結果だけで決まるものではありません。そのため、考えなければならないことはまだまだ多くあります。

もう一点、私個人として皆さんにお伺いしたいこと、あるいはお願いしたいことがあります。先ほど冒頭で、県の事務局に質問させていただきましたが、平成 30 年に作成された「不登校未然防止及び不登校児童生徒への支援のための行動指針」があります。後日でも構いませんので、学校関係者の皆様、また、とりわけ不登校支援やフリースクールに関わっておられる皆様に、一度目を通していただければと思います。私自身、この指針の内容をすべて否定すべきだとは考えていませんし、現在でも重要な観点は多く含まれていると思っています。

一方で、現在の状況に照らし合わせると違和感のある表現がないか、あるいは誤解を招く形で伝わってしまうフレーズがないか、さらには、もっと強調した方がよい点や、事例として盛り込んだ方がよい内容がないか、といった視点で見ていただければありがたいと思います。

今日は時間がありませんので、この場でご意見をいただく必要はありませんが、後日、事務局を通じてでも結構ですし、私宛てでも構いませんので、お気付きの点をお寄せいただければと思います。私自身も、改めて落ち着いて読み返してみたいと考えています。ホームページには、現在も掲載されていると思いますので、ぜひご覧いただければと思います。例えば、タイトルにある「不登校未然防止」という表現については、子どもや保護者によっては違和感を抱く方がいるかもしれません。現在は、多くの自治体で「不登校支援」という言葉が使われるようになっていますので、タイトルを変えるだけでも受け取られ方やニュアンスは変わるのではないかと思います。

また、この資料には副題も付いており、「児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的に自立するための支援を目指して」という記載があります。これは今見ても非常に重要な視点であり、価値のあるフレーズだと感じています。

さらに、本文中には「新たな不登校を生まない」という表現があります。この表現についても、皆さんはどう感じられるでしょうか。例えば、学校そのものを見直し、誰もが過ごしやすい空間づくりを進めていくという文脈で捉えるのか、それとも「不登校を生んではならない」という捉え方になるのかによって、支援に関わる人のモチベーションやゴール設定、マインドセットも変わってくるのではないかと思います。一方で、資料の中には「すべての子どもに自分の居場所がある学校づくり」といった、とても素敵なフレーズもあります。全体で 11 ページほどの資料ですので、ぜひお時間のあるときに一度ご覧いただき、ご意見等をお寄せいただければと思います。よろしくお願いいたします。
本日は、全３回のうちの第 1 回ということで、皆さんから幅広く問題意識やご意見をいただき、大変勉強になりました。本日いただいたご意見については、事務局とともに整理をさせていただき、次回以降の論点設定や、取組の進捗状況を確認する際の参考にしていきたいと思います。

本日発言できなかったことや、時間の都合で十分にお話しいただけなかったこともあったかと思います。その点については、メモでも構いませんので、何らかの形で事務局へフィードバックをいただけるとありがたいです。

それでは、私からは以上です。本日はありがとうございました。